

**山の旅 心の旅**

**山の名著を訪ねて**

**大野清吉 作品集**



心の旅

山の名著を訪ねて

## 山の名著を訪ねて 目次

### 「山の旅 本の旅」… 登る喜び、読む愉しみ

… 大森久雄 著・平凡社

六十三才から登山を再開した私にとつてこの本が、山の本を改めて読みたい、読み直したいと思ふきっかけとなった。本の表紙にある「登る喜び、読む愉しみ」や、カバーの「山を歩けば本が思い出され、本を読んでいれば山が懐かしくなるのである」のフレーズが、若い時とは違う今の私の心境に強い「たしかに…という実感」を与えた。

### 「山署の森へ…横山厚夫著・山と溪谷社」

山の本を楽しんで…という著者の願いは、先に紹介した「山の旅・本の旅」の著者の大森久雄と同じである。この本も個別の山の本を上げて解説するのではなく、さまざまな話題の展開の中から関係する本をさりげなく紹介している。

### 「山の旅 明治・大正編／大正・昭和編

… 近藤信行 編・岩波文庫・岩波書店

岩波書店の文庫本に「山の旅 明治・大正編」と「山の旅 大正・昭和編」がある。仕事を引退して「登山」を再開した私は、山の本の「読書」も再開したいと常々思っていた。

### 「山の名著 明治・大正・昭和戦前編

… 近藤信行編・自由国民社

現在、私たちが簡単に手に取ることのできる「山の本を紹介する本」を、私なりに「山の名著を訪ねて」と題してまとめた。そのきっかけとなったのがこの「山の名著」である。ここで紹介されている本は、私が今迄に読んだ本や、読みたいと思っている本がほぼ網羅されている。

### 「山の名著30選…福島功夫著・東京新聞出版局」

モダン・アルピニズムをリードした知性たち…この本の副題である。…モダン・アルピニズム、もしくは登山におけるモダンニズムから、僕たちは何を継承すべきか。…取り上げている国内外の「山の本」は、非常にオーソドックスだ。この本は「岳人」に掲載された「アルピニズム再読」「続・同」の書籍紹介をまとめたものだ。

### 「岳書縦走…雁部貞夫著・ナカニシヤ出版」

本の名前が面白いので手に取ってみた。一九七九年から一九八九年までの十年間に出版された本の書評である。地域的にはヒマラヤや中央アジアに関するものが多い。また、外国の著書の翻訳も多く、さらに写真集や地図なども紹介されている。

## 山の名著を訪ねて はじめに

私は山へ行けない時、山に関する本を読んで「山への想い」をかなえる。ただ、書店の月刊雑誌の「山と溪谷」「岳人」や「新ハイキング」などは興味を引くテーマの時だけ読む。所詮、山のガイドや山の道具の紹介の域をでない。暇つぶしにはなるが「山への想い」をかなえることはできない。

山の小説もあるが。現実の登山を知っている者にとつては、作り話すぎる。山の小説は井上靖の「氷壁」が有名だ。若い時も年を取ってからでも読んだが面白いとは思わなかった。新田次郎の山岳小説も全集まであるが、読みごたえがあったのは「強力伝」くらいか。「槍ヶ岳開山」や、映画化までされた「剣岳・点の記」も読んだし映画も見たが、やはり何かが足りない。最近も文庫本で伝記的な「山の小説」もどきが出ているが、あまり手を出す気になれない。

私の読んだ山の本の中で若い時から記憶しているのは、田孫一の「山のパンセ」、吉野満彦の「山靴の音」がある。加藤文太郎の「単独行」や松濤明の「風雪のビバーク」なども読み影響を受けた。登山再開後の今では、印象深いのは山口輝久の「八ヶ岳彷徨」と、海外ではガストンレビュファの「星と嵐」を挙げたい。最近亡くなったとの報で読んだ、モリス・エルゾグの「処女峰アンナプルナ」もよかった。こうして私の好みを見ると、紀行文や随筆（エッセイ）が多いように思う。山岳紀行文と山岳小説の区分は、虚構がないのが、事実在即しているのが、山岳紀行文と言えらるのだろうか。

有名な文筆家（実は百名山の深田久弥）は言っている。「山は登るだけで結構である。男女のカットウや殺人事件を山の上まで持っていく気はない。平地でたくさんだ」。まさにその通りだろう。ただ、山岳小説を認めたくないのは、登山をする人だけが言えることなのかもしれない。

私の山の本漁りは、若い時も今までも、このように行き当たりばつたりの状態が続いていた。時間の余裕ができた今、腰を据えて「山の本」を読んで、しかも私なりの書評もしてみたいと思うようになった。まず手掛けたのが「山の本を紹介している本」探しだ。近場の図書館や、大型書店や、専門の古書店、さらにはネットのアマゾンまで、あたつてみた。

そこから見つけ出したのが、ここで紹介する「山の本」の本である。最初の二冊（「山の旅・本の旅」、「山書の森」）は、「登山」だけでなく「読書」も……のお勧めの本である。特に、大森久雄の「山の旅・本の旅」が私はいいと思う。後の四冊は、系統的・具体的に、個別の本を紹介している。

近藤信行編の岩波文庫「山の旅」（二冊）は、明治・大正・昭和に活躍した人たちの、著作を直接掲載している。残りの三冊は、具体的な書作の解説や著者の紹介をしている。この四冊の中では、近藤信行が代表編集の「山の名著：明治・大正・昭和戦前編」が、私のお勧めである。ただここでは国内の本が中心で、海外の著作（翻訳本）は、福島功夫の「山の名著30選」の海外編を読まなければならない。まず国内の本から選んで、山の本を楽しんでみてほしいと思う。

## 「山の旅の本の旅」…登る喜び、読む愉しみ

…大森久雄 著・平凡社

六十三才から登山を再開した私にとつてこの本が、山の本を改めて読みたい、読み直したいと思うきっかけとなった。本の表紙にある「登る喜び、読む愉しみ」や、カバーの「山を歩けば本が思い出され、本を読んでいれば山が懐かしくなるのである」のフレーズが、若い時とは違う今の私の心境に強い「たしかに…という実感」を与えた。著者は冒頭の「本もまた山仲間」で次のように述べている。

…山に登るのはたのしい。長い年月、こういう趣味をもつて人生を過ごしてこられたのは幸せだ。草原の山も樹林の山も、岩や氷雪の山も、それぞれの季節にそれぞれの体力と技術と経験とによつて相応にたのしむことができる。それに、ある日、山に出かける予定が天候に恵まれずに中止する。ほかの野外の遊びならそれでおしまいだろうが、山の場合にはなんの不都合もなく、すぐに方向転換ができて、山の本を讀んで過ごすという別のたのしみを味わうことができるのだからありがたい。

…山を歩いていて、いつか讀んだ本のなかの情景が頭に甦ってくることもあれば、逆に本を讀みながら、無性に山に行きたくなることもある。信濃大町にあった旅館対山館の主人で歌人の百瀬慎太郎は「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し」という絶唱を残したが、これに倣うと、山を歩けば本が思い出され、本を讀んでいれば山がなつかしくなるのである。

著者はまた、私たちが山だけに限らず、現実の日常が、時空（注…時間と空間…いまとここ）の制約を受けていること、それを越えるには本との出会いしかないことを述べている。

…わたしたちが一生のあいだに親しくお付き合いできる人の数は、きわめて限られている。しかし、見ず知らずの、世代も時代もちがう人も、本の上でならいくらでも交歓できるのだからありがたい。それは相手が山であつても同じ。世界はもちろん日本の山だつて、そのすべてに登るなんてことはできっこない。しかし、遠い国の山も季節のちがう山も、本を通じてなら親しくなることができるのだ。

著者は、深田久弥の文章も紹介する。かなりきつい言葉だが、私自身、若い時の山狂いしていた時は、「ヒマとかね」はすべて山と道具につき込んでいたのを思い出す。今は山も本も、そして書くことまでも、広がりや深みがでてきた。

…近頃の登山者は、山行の道具にかけては贅沢だが、山の本に対しては吝嗇（りんしょく、注…ケチ）である。すぐれた山の本一冊が与えてくれる大きな楽しみをおもえば、わたしはそういう吝嗇が不思議でならない。ペンよりもピッケルを、という山男の信条はわたしも好きだが、しかしそれは書物に堪能した人の逆説的な表現として生きてくる言葉であつて、何も読まない頭脳の空疎な人がそんな言葉を吐いたつて、ただの山登り屋さんの空威張りとしか受取れない。登山を豊かにする精神的な何物か、その何物かを含んでいる書物が並んでいてこそ、わたしはその人の山登りを信用する。

…山をめぐる世界からは限らないたのしみを得ることができ。先人たちはそこから豊饒な世界を生みだして残してくれた。それを反芻して次の山登りにつなげるのできる本の世界ほどありがたいものはない。山の思い出が人それぞれに豊かであるように、本からもまた豊かな世界を汲みとることができ。本のなかからは、過去の山はなつかしい思い出を、未来の山は魅惑的な誘いをわたしたちに届けてくれる。

著者は、「趣味の山・近代登山の誕生」と題して、近代登山の黎明期を次のように述べている。私も「近代登山のパイオニア：小島烏水とウエストン」と題して、この二人の先人の著書を読み、ぜひまとめてみたいと思っている。

…こうして明治を迎えるわけだが、実際には日本の山は、山岳信仰者、狩猟者、薬草採取者、柚人など、山を修行・生活の場とする人々によって奥まで歩かれていたし、古くから山林（注：鉱山など地質も）調査のための現地踏査もおこなわれていた。雪と氷と岩の（注：欧州の）アルプスとの大きなちがいである。明治後半期になると、趣味の山登りとしての近代登山が急速にひろがる。近代登山とは「ある特別な功績を作ることや、あるいは特殊の科学的目的から離れて、まったく山登りそれ自体のために企てられるものをいう」と登山史家の山崎安治は「新稿・日本登山史」で言っている。

…一八九四（明治二十七年）年に出た志賀重昂の「日本風景論」は、革新的な文章をのせて登山の気運を掘り起こし、啓蒙の書として反響を呼んだ。この本に触発されて山に踏み込んで

いった人は多い。そのひとりの小島烏水は、岡野金次郎と一九〇二（明治三十五年）年に槍ヶ岳に登る。…「余が鎗ヶ岳登山をおもひ立ちたるは一朝一夕のことにあらず。何が故に然りしか。山高ければなり。山尖りて峻しければなり」…現在は「山岳紀行文集・日本アルプス」の冒頭で烏水が披瀝したこの覚悟は、現在のヒマラヤにも通じる感覚である。

…登山史がこのふたりの槍ヶ岳を日本の近代登山の始まりと見るのもそのためである。そしてその三年後の一九〇五（明治三十八）年には、イギリス人で山好きの宣教師ウオルター・ウエストンに代表される西欧の影響を受けて、登山を趣味とする人々の集まり、山岳会（のちの日本山岳会）が誕生する。

著者はまた、自らが出版にかかわっていた関係もあり、当時の山の本や雑誌の出版について述べている。私も絶版になつていく古い本を読むと、今は聞かない出版社名に出会う。また山の雑誌で、私たちが若い時に熱中して読んだ「岩と雪」は今はない（厳密には山溪から類似のものが季刊）。

…時代が進み、一九二〇年代以降になると、日本の山登りは、岩や氷雪のきびしい山であるいは漂泊・遁遥の山旅へと発展・分化してゆく。それぞれの世界で山はすぐれた文章を生みだす。その点で画期的な年といえるのが一九三〇（昭和五年）年。この年、山と溪谷社が誕生、五月に雑誌「山と溪谷」が創される。その前にも山の雑誌はあったが、いずれも同人誌、サークル誌であつて、周辺の状況は商業誌として山の雑誌が企画されるまでに開墾されていた。

…山岳書専門出版社として数々の話題作を刊行することになる朋文堂もまた、高畑棟材の「山を行く」を第一作として同じ年、この世界に登場した。梓書房は山岳書の出版活動を始めるのもこの年である。梓書房は日本山岳会と組んで年刊「山日記」を刊行、日本山岳会もまた十月から毎月「会報」を出すことになる。現在にまでつづく山の月刊誌は、「山と溪谷」とこの「会報」(のち「山」に改称)のふたつだけである。一九三〇年という年にはこれだけの豪華と集中。山の本の不思議な豊作年として記憶される。

…全集・アンソロジーの時代：朋文堂からは一九五九年から「世界山岳全集」全十三巻が刊行になる。実質的に企画・編集を取りしきったのは安川茂雄だった。版權問題や分量からどれもが抄録なのは致し方ないが、主要な作品をそろえて流れがつかめるようになっていて、海外の山の文章を主体とした初めてのアンソロジーであった。…同種の企画は版元を変え、こんどは日本版が一九六二―六三年にあかね書房から刊行された。「日本山岳名著全集」全十二巻である。これもまた、抄録ではあっても日本の代表的な山の文章を集め、遭難記録にも目を向けていて、たいへん貴重な資料となった。

…雑誌の時代：山登りが肉体労働以外の世界をもつことに焦点を絞って編集されていたのが、月刊誌「アルプ」だった。一九五八年三月の誕生。「アルプ」は長生きをして、一九八三年二月、三〇〇号で終刊した。これには串田孫一と編集者大洞正典の力が大きい。版元の創文社はこれを母胎にして山の本を生みだす。「アルプ」と同じ年、山と溪谷社から「岩と雪」

が創刊された。こちらは、はげしい岩と雪の山の行動に重点をおいていた。創刊一号は一九五八年、尖鋭的な岩登りや積雪期登筆記録など、いま見ても当時の熱気が伝わってくる。全集・アンソロジーの時代の次は雑誌の時代かもしれない。

海外の山の本の紹介もある。私も何冊かだが読んだ。やはり国内の山や岩とは異質の雰囲気伝わってくる。

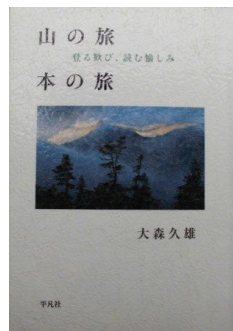
…知的飢餓状態にあった戦後、強烈な印象が残っている山の本として、一九五三年に翻訳が出たモリス・エルゾグの「処女峰アンナプルナ」をあげる人は多い。登山家の性格やその行動が具体的に描き出されていて、山の本にはめずらしいくらいにダイアログ(対話)がある。…ガストン・レビュファ「星と嵐」(一九五五年)から、ヘルマン・ブル。八千米の上と下」、ヘックマイヤー「アルプスの三つの壁」、ハインリヒ・ハラ。白い蜘蛛」、ギド・マニョーヌ「ドリユの西壁」、リオネル・トレイ「無償の征服者」、さらにはワルター・ボナッティ「わが山々へ」「大いなる山の日々」(一九七四年)まで、いずれも同様に衝撃的だった。…この時代、ヨーロッパ山岳書の翻訳は、ドイツ語関係が主として上智大学の横川文雄、フランス語関係が早稲田大学の近藤等によって紹介され、アルプスやヒマラヤの事情が伝えられた。

著者の大森久雄は、一九三三年、東京生まれ、早稲田大学文学部仏文科卒業、朋文堂、実業之日本社等で、山・旅環形の雑誌、書籍を中心とした編集者生活を送った。著書も多い。



参考図書紹介 「山の旅 本の旅  
…登る喜び、読む愉しみ」

著者 大森久雄  
出版社 平凡社



目次

本もまた山仲間

I. 本と人と山と

山が生む本 本が生む山

一本から見る日本登山側面史ノート

深田久弥の山と「日本百名山」／「日本百名山」その光と影

深田久弥の山登り／あの頃のことー「日本百名山」誕生前後  
茅ヶ岳戸思い出す人

II. 山と本と

奥多摩の山々…とっておきの山／大菩薩嶺・滝子山

大菩薩嶺・大蔵高丸／奥秩父・和名倉山…森への郷愁

金峰山／遥かな山・平ヶ岳／北アルプス・烏帽子岳から双六岳へ

甲斐の白根から北岳へ／鳥海山と月山…歴史が生きる山

III. アルプス…山と人と本と

アルプスの空

アルプスの日々… スイスの山の午後…メンヒに登る…

ユングラウに登る…山と人あれこれ

アルプスと日本人…草鞋を脱いで山靴へ…アルプス世界の発見ー

辻村伊助「スイス日記」…旅人から登山者へ

充実した登攀活動の誕生…六級の世界

観光旅行ー文人たちのアルプス

あとがき

あとがきから…山は本を読まなければ登れないわけではない。だから山の本がなくても、ただ登るだけなら困ることはない。しかし、先人の残した本がなければ、今の私たちの山登り自体が存在していないこともまた確かである。…

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…山と溪谷社＝ ￥1500+税 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本￥200～+ 送料￥250 <2014.02 現在>

## 「山署の森へ…横山厚夫著・山と溪谷社」

山の本を楽しんで…という著者の願いは、先に紹介した「山の旅・本の旅」の著者の大森久雄と同じである。この本も個別の山の本を上げて解説するのではなく、さまざまな話題の展開の中から関係する本をさりげなく紹介している。著者は冒頭の「山の本への招待」で次のように述べている。

…本を読む山登りを…本を読むということは、それが山の本であろうとなんであろうと、心を豊かにしてくれるものですし、素晴らしい別世界へ貴方を誘い入れてくれるものなのです。…私は、そこで山登りをやっている貴方でしたら、山の本を、もう少し読んでみませんか。貴方の山登りがいっそう楽しく、充実すること受け合いです。また、それを語るとき、お友達との山登りまでも楽しくするに違いありません。

…たとえば、の話です。田部重治の名を知らなくても、雲取山へ登るのにはなんの支障もありません。ガイドブックのその部分をぎつと読んでおけば、十分に登って下りてくれます。…でも、ね。人と本との佳き出会いだってなくはないのです。雲取山登山も、その出会いの一つとってよいでしょう。これをよい機会にして、田部重治の本を読んでみてはどうでしょうか。

…田部重治には「甲武国境と雲取山と多摩川」という紀行文があります。それを貴方が雲取山へ登る前、あるいは下りてきてからでもよいのですが、もし読んだとしたら、貴方の

雲取山山行はさらに充実したものになるでしょう。なぜなら、田部さんが明治四十二年（一九〇九）の五月に、初めて雲取山へ登ったときの想い出話をしながら案内してくれるのですから、これは、もう、こたえられない楽しさです。

…また、田部さんは、その山行を共にしている木暮理太郎さんを貴方に紹介してくれるでしょう。このように雲取山登山を契機に田部重治や木暮理太郎の名を知り、その本を読むようになれば、前途は明るく聞けたも同然です。山はただ登って下りてきて、「ああ、面白かった、くたびれた」で終りにしてしまうのでは余りにももったいない。田部重治にしろ木暮理太郎にしろ、私達には多くの敬愛すべき先人がいて汲めども尽きせぬ大きな遺産を残してくれているのですから、それをわが物として、山登りをもっともっと充実させていこうではありませんか。

著者は登山史や登山文学史の本にも次のように言っている。個別の本を読み進めていくにあたり大切な指針にもなる。

…私たちも日本登山史を勉強しておこうではないか。一冊の本を読むのにも、その背景や周辺の知識があるのとないのとでは、面白さが格段に違ってくるものである。自分の山登りが、どのような長い過程をへて、いま、ここに在るのかを知るのには非常に大事なことだと思う。山登りは、いつの時代にも先人の業績を受け継ぎながら発展してきたものであり、その業績を知らなくては、本当の発展はあり得ないといつてよいだろう。常に温故知新でありたいと願う。

参考図書紹介 「山書の森へ…山の本-発見と探検」

著者 横山厚夫  
出版社 山と溪谷社

目次

山の本への招待・前書に代えて  
山で読む本 シェークスピアに始まって  
深田久弥さんのこと、本のこと  
北壁は聖都への途  
低山歩き・金言集

楽しからずや極地探検の本  
辻村伊助 爽やかな青春のアルプス  
立体の山を立体（ステレオ）に見る  
ときには、山を舞台の劇映画を  
辛口の登山家 H・W・ティルマン

アンソロジー・雲取山  
山岳小説と登山史を読む  
W・ノイスの周辺を、もう一廻り  
三件の遭難、三人の死者  
「レニ」から The Climb まで

あとがき

あとがきから…あとは、ご自分でお気に入りの本、面白い本を探していただければよいと思っています。この本が少しでも、そうした読者の本探しのお役にたてばよいと願っています。…いずれにせよ、新刊、古書の別なく丹念に書店の書棚を、さらには新聞などに載る広告に目を通すことをおすすめしておきます。いつなごとき、これはと驚き、狂喜するような大発見がないとも限らないからです。山や極地の探検と同様に、書店の探検、また楽しからずやなのですから…。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…山と溪谷社＝ ￥1500+税 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本￥200～+ 送料￥250 <2014.02 現在>



「山の旅 明治・大正編／大正・昭和編」  
…近藤信行 編・岩波文庫・岩波書店

岩波書店の文庫本に「山の旅 明治・大正編」と「山の旅 大正・昭和編」がある。仕事を引退して「登山」を再開した私は、山の本の「読書」も再開したいと常々思っていた。多分この文庫本を見つけたのは、新宿西口のビル地下道街にある大型書店だったと思う。

彼は下巻の解説「近代の山・人・文学」で次のように述べている。…それでも二冊の目次をならべてみると、明治十年代から七、十年のあいだ、日本人はいかに山にむかいあつてきたか、山に何を感じとつて、いかに山を描いてきたか、その一端がわかるかと思う。ひとこといえば、近代の登山は文明の発達とともになされた人間的行為であった。近代化がすすむにつれて、登山者はひろい視野と新たな用具と技術を持つことになったが、日本人はころころのうちにある伝統的なかたちを忘れ去つたわけではない。

…登山の推移、人間の出会い、友情、そのかけがえのない人生がわかつてくる。そこに山の文学が生まれている。すぐれた山の文章を読むことは、自分の登山経験と照らし合わせて其の人を学ぶことであり、その時代を知ることにつながってくる。…山との親しみを深めること。自然への巡礼。日本人の山登り、登山者のころ、そして文学を考えるうえで極めて重要なことである。自然と対峙するのではなく、自然の中に溶け込んで一つになること。…それだけにすぐれた山の

文章を読んでいくと、ますます面白くなるのである。…このように締めくくっている。

まずこの本で紹介されている「紀行文などと著者」を見ると非常に多岐にわたっていることに驚く。まずは、文学者：私たちが学校で習った作品と著者、例えば幸田露伴（私たちは「武蔵野」を思い出す）、夏目漱石（有名な「吾輩は猫である」を思い出す）、同じように芥川龍之介、志賀直哉、中里介山、井伏鱒二など、歌人の正岡子規、斎藤茂吉、大町桂月、評論家の小林秀雄まで、すごい広がりだ。さらに他分野の学者を加えれば、武田久吉、牧野富太郎、柳田国男、寺田寅彦など、私の知る限りでも多士済々である。これらの人たちが山好きであり、登山家でもあり、山の記録を残したわけだ。

近藤信行の来歴は、早稲田大学仏文科卒、同大学院修士課程修了。中央公論社で「中央公論」「婦人公論」などの編集に携わつた後、一九六九年、文芸雑誌「海」を創刊する。翌年まで編集長を務め、七三〜七六年再度編集長になり退社。一九七八年「小島烏水 山の風流使者伝」で大佛次郎賞を受賞した。山梨県立文学館館長を二〇一三年三月まで務めた。著書（編集）は「小島烏水 山の風流使者伝」を始め、「深田久彌」「その山と文学」、大下藤次郎 紀行文集、「山と溪谷」田部重治やここで紹介している「山の旅 明治・大正編」大正・昭和篇、「山の名著 明治・大正・昭和戦前編」など多数にのぼる。私は、彼は山の知性の伝道師だと思う。私自身、彼の手助けで、多くの山の本を知り、山に対する先人たちの情熱を知り、広く深く山の世界をめぐることができた。

参考図書紹介 「山の旅 明治・大正編  
大正・昭和編」

編者 近藤信行  
出版社 岩波書店（岩波文庫）

明治・大正編

松浦武四郎…乙酉掌記（抄）

正岡子規／野中到／幸田露伴／夏目漱石／河口慧海  
武田久吉／牧野富太郎／吉江喬松／大下藤次郎  
柳田国男／柴崎芳太郎／鶴殿正雄／芥川竜之介  
志賀直哉／高頭仁兵衛／小暮理太郎／長谷川如是閑  
宇野浩二／加賀正太郎／鹿子木員信／辻村伊助

小島烏水…火と氷のシャスタ山

大正・明治編

榎 有恒…アイガー東山稜の初登攀

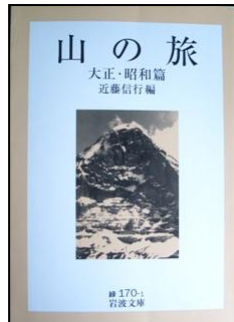
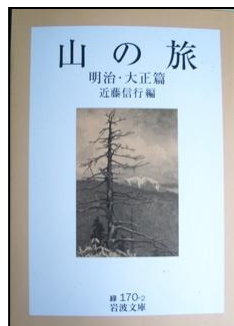
板倉勝宣／大島亮吉／三田幸夫／松方三郎／浦松佐美太郎／長谷川伝次郎  
平野長衛／冠松次郎／西岡一雄／細井吉造／大町桂月／別所梅之介  
斎藤茂吉／中里介山／河田禎／石川欣一／百瀬慎太郎／赤沼千尋／田中薫  
村井米子／小川登喜夫／山崎安治／寺田寅彦／井伏鱒二／小林秀雄  
中西悟堂／岡茂雄／中村清太郎／足立源一郎／伊藤秀五郎／今西錦司  
榎有恒／深田久弥／松濤明／田淵行男

山口輝久…岩小舎の記  
解説

解説から…このたび「山の旅」と題して「明治・大正編」に23編、「大正・昭和編」に37編を収めた。ここには登山記もあれば、旅の記もある。また、山と自然と人間にかんするエッセイもある。…二冊の目次をならべてみると、明治十年代から七、八十年の間、日本人はいかに山にむかひあってきたか、山に何を感じとって、いかに山を描いてきたかその一端がわかると思う。…

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…岩波文庫＝各 ¥700+税 大型書店に在庫あり <2014.02 現在>  
アマゾン＝ 中古本¥250～+ 送料¥250 <2014.02 現在>



## ■調査ノート

私のこの「山の旅」の生半可な書評より、「ロッジ山旅」の長沢洋氏のこの本への書評は、非常に的確であり納得させられる。あくまで私自身の「調査資料」として記録しておく。

：近藤信行氏が、日本の近代登山黎明の明治から昭和にいたる山の文章の中から、それぞれの時代を代表するものや古典ともいえる六十篇を抽出して、おおよその年代順に並べてくれた本である。近代登山の流れが目次を眺めているだけでも彷彿とするのが編集の妙である。

：山の文章といえば、すなわち登山家の文章となるのが現在私たちのもつ認識だが、漱石や茂吉、鱒二など決してその分類には入らない作家や学者、画家の文章をも納めたのは、文学全体に造詣の深い近藤氏ならではの趣向で、かつては山の未知を探る思いが色々な分野にあつて、登山家はその中から特化していったものだったのだろう。作家や文章をジャンルで分ける難しさと無意味さを示しているともいえる。

：どんな分野にしろ、ベスト本は、初心者にとつては手引書となり、手練にとつてはどんなものが選ばれているのかが気にかかる、といった具合で、よく売れる企画なのだろう、発行早々増刷を重ねたという。岩波文庫はめったに絶版にしないし、読書人の信頼は厚いから、この本そのものがスタンダードとなる可能性がある。

：図書紹介とはいふものの、各々が感想を持ってほしいことである。かつて読んだことのある文章でも、年齢を重ねればまた違う印象を持つこともあるだろうし、初めて目にする昔の文章に、かえつて新鮮な驚きを持つこともあるだろう。そんな体験がこういった本を読む功德だと思ふ。そこで山の文章に関する私なりの考えを述べることで責を果たしたい。

：「山の旅」に納められたのは近代登山が始まって以来残されてきたおびただしい文章のほんのごく一部にしか過ぎないのを思うとき、登山者はなぜかくも文章を残してきたかとの疑問がわく。登山者に文章家が多いのか、はたまた文章家に山を好む人が多いからか。だが、少なくとも登山者に読書家が多いのは間違いないようだ。このあたりの事情を松方三郎氏は、山岳人は反芻動物に属する、登つて楽しんだ山を、語つて書いて読んでさらに味わうのであると説明した。では山岳人とはなぜそんなにも反芻したがるのだろうか。

：「読書行為の底には過去とつながりたいという願いがあり、文章を綴ろうとするときには未来へつながりたいという想いがある」と井上ひさし氏はいう。なるほど私たちは読書によつて、今この世にいない人とも話をすることができる。彷彿と目の前にすることができ。書き綴ること、決して会うことのない未来の誰かに自己を知らしめることができる。

：結局、私たちは文章（大きな意味での記録）があつてこそ、この短い生、限られた持ち時間にさからえるのである。では登山者の、未来へ、また過去へとつながりたいという切

実な欲求は何に由来するのだろうか。

：人間によるルールに基づいて人間相手に勝敗を決める、いわゆる一般的なスポーツなら、さらにそれが衆人に見られる中で行われるなら、競技者の表現はその競技中のみに完結する。記録は数字的に残るだけでよい。よしんばそれを後に文章で表現しようとした競技者がいたとしても、あくまでつけたりではない。

：一方山岳という、人の生活から遠く離れた場所では、はなはだしきはたったひとりによって為される登山では、その行為はほとんど書かれたことよつてのみ実在する。時代を切り開いた画期的な登山は、そのことごとくが当人の文章によつて歴史に名を刻んでいる。極論すれば、書かれなかつた登山は存在しない。書くこと（または書かれること）は登山家たる資格の最重要なひとつといえるだろう。

：時間よつて淘汰されることなく、今や古典として残つた山の文章や本に共通するのは、近代登山黎明期に当然あつた初登頂などの華々しい事実もさることながら、山を題材にしたからこそ發揮された人間の精神の有様が描かれていることである。山や自然がみずから語りかけるわけではないのだからそれは当然ともいえる。つまり登山という行為は、いかな肉体の酷使といえども、それをつかさどる精神の働きの方が際立っている。

：他のスポーツにはありえない質と量の文章や本が、山岳

書、または山岳文学と呼ばれる一大山脈を造りだし、今だに造山活動をやめないでいることはその証左で、私たちが登山を単なるスポーツの一分野とされるのには違和感を覚える理由がそこにある。登山はスポーツというよりはむしろ精神活動に近い。だから、登山としては何ら画期的なものではなくとも、すぐれた山の文章は成立しうるのである。

：過去の登山記を読むのは、何より先人の思想を学ぶことである。思想もまた書かれて初めて存在する。おのれを未来へとつなげるのは、おのが思想を文章に留めることである。山という底知れぬ奥深さと多様性を持った舞台は、各人各様の思惟の場として汲めど尽きせぬ材料を提供してきた。山に魅せられた人間が何でそれを文章にして後世に伝えずにいられようか。読んで学ばずにおられようか。山の文章が多く書かれ読まれてきた所以である。

：それに、いったい山の文章は事実から離れられるだろうか。否、山の文章は宿命的にそれから完全には離れられない。山岳小説がついに山岳文学（仮にそれをおもに登山者だけが読む狭義の文学とすれば）の主流になりえないのはそのせいで、架空の世界最高峰に初登頂した物語がなんで登山者の感動を呼ぶだろう。もし完全に山の文章が事実から離れたなら、逆説的だが、読者を限定しない、普遍的な文学的価値を持つだろう。

現在、私たちが簡単に手に取ることのできる「山の本を紹介する本」を、私なりに「山の名著を訪ねて」と題してまとめてみた。そのきっかけとなったのがこの「山の名著」である。くしくも「山の旅」と同じ、近藤信行の著(編)である。ここで紹介されている本は、私が今迄に読んだ本や読みたいと思っている本がほぼ網羅されている。

私の「心の旅」でまとめてみたい「日本の登山のパイオニア」：小島烏水とウエストン」や「奥秩父を讃えた人たち」：小暮理太郎・田辺重治・原全教・山田哲哉、一応まとめたあげた「山岳画家の世界」：太下藤次郎・茨木猪之吉・中村清太郎・足立源一郎」など、この本が手助けとなった。この本の編集・構成も気に入っている。本の内容の解説とともに、著者の人物紹介・歴史的位置づけ、他の著作の紹介もあり、さらに興味が増し理解が進む。

編集・解説者を代表して近藤信行は、この本の中で次のように、わが国の明治以降の登山文化を述べている。

…その草創期にあつて、未知の大自然をもとめて深山幽谷にわけいった人々の表現には、発見と感動がこもっている。山に接したときのおどろきと陶酔から生まれたのは、美であり、力であり、生命であつた。日本の近代化があらゆる面で急速な発展をもたらしたとすると、山は人間に芸術的感性をうえつけ、自然科学の解明にいとぐちをあたえたといえるだ

ろう。伝統的な旅ごころと美意識のうえに、山はあらたな視点からとらえられ、日本人の生活のなかに生きはじめた。そこに近代の登山があつた。

…山登りには肉体的な充足とともに精神的な悦楽がある。文学・芸術や自然科学への興味がくわわつて、山には独自の香気がかもしだされてきた。そして、すぐれた登山者は自身の体験と研究をもとに内面のドラマを描いてきた。古い山の書物を読むことは、松方三郎の言うように懐古趣味ではなく、新しい登山の基盤をつくるために必要なことである。

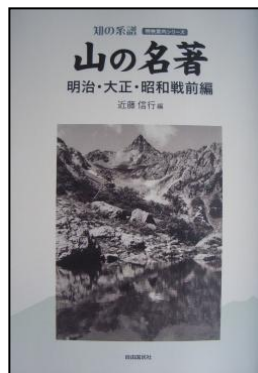
…西欧の登山技術が導入されて、日本の登山界はあらたな段階にはいる。岩と雪がその舞台となり、ヴァリエーション・ルートの開拓がつきつぎとくりひろげられた。そして海外の高峰へも登山者の限がむけられてゆく。登山は楽しみみのあるとともに、厳しい大自然への挑戦であつた。その一方において、未開拓の山稜や谷筋に足跡がしるされ、交通の発達と施設の拡充は全国各地に山の愛好者を生んだ。

…そして山のジャーナリズムが活発に動きはじめる。そこにみられるのは、登山の多様化である。わが国に近代登山の精神が芽生えてから、日本人はわずかな時間のなかで、あらたな登山文化をきづいたといえるだろう。大正中期から昭和前期に刊行された本、そしてそこに活躍した人々の著作には、つねに未知の登高をもとめるエネルギーがあり、日本の山の独自性を再確認する動きがみられる。山の本は、日本文化の一角に厳然と存在を主張しはじめている。



## 参考図書紹介 「山の名著」

編者 近藤信行  
出版社 自由国民社



目次 山の名著…明治・大正・昭和戦前編

### I. 山へ行く——近代登山黎明期の記録

松浦武二郎紀行集／日本風景論  
欧州山水奇勝／日本アルプス—登山と探検  
極東の遊歩場／西藏旅行記／山水無蓋蔵  
日本アルプス／氷河と万年雪の山／アルピニストの手記  
富士案内／日本山嶽志／千山萬岳／高山深谷／尾瀬と鬼怒沼  
明治の山旅／山の憶い出／日本アルプスと秩父巡禮／わか山旅五十年  
黒部／山溪記／山岳礼拝／山旅の素描／スイス日記／ハイランド  
アルペン行／ヒマラヤ行／山／山の人生

### II. 山を抱く——挑むものと愛する者たちの記録

山行／わたしの山旅／アルプス記／アルプスと人／わが登高行  
山・研究と随想／先駆者・アルプス登山者小伝／山と雪の日記  
たった一人の山／ヒマラヤの旅／ナンダ・コット登攀／朝の残照の山  
日本山水紀行／山岳紀行／山岳美観／北の山／山へ入る日  
山に忘れたパイプ／赤石溪谷／雪・岩・アルプス／ある山男の自画像  
単独行／氷河の山旅／山と雲と蕃人／山岳省察／日本山岳研究  
登山の文化史／山・雪・森／霧の旅／一日二日 山の旅／山の絵本  
山の素描／伊那谷・木曾谷／山に描く／山麓滞在／山の達人／尾瀬  
尾瀬と桧枝岐／奥秩父／樹林の山旅／泉を聴く／山を想へば  
雪に生きる／山の隣人／炉辺山話／上越国境／霧の山稜／  
山へ—わが登高記／原野から見た山

**冒頭の解説（近藤信行）** から…山登りには肉体的な充足とともに精神的な悦楽がある。文学・芸術や自然科学への興味がくわわって、山には独自の香気が醸しだされてきた。そして、すぐれた登山者は自身の体験と研究をもとに内面のドラマを描いてきた。古い書物を読むことは、松方三郎の言うように懐古趣味ではなく、新しい登山の基盤をつくるために必要なことである。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…自由国民社＝ ￥1700+税 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本￥950～＋ 送料￥250 <2014.02 現在>

## 「山の名著30選」：福島功夫著・東京新聞出版局

モダン・アルピニズムをリードした知性たち……この本の副題である。この本の「あとがき」で、…ポストモダンといわれる時代で、モダン・アルピニズム、もしくは登山におけるモダニズムから、僕たちは何を継承すべきか。…と述べている。著者の意気込みというか、気取りというか、この部分だけでは、多少の嫌味を感じさせるが、取り上げている国内外の「山の本」は、非常にオーソドックスだ。この本は「岳人」に掲載された「アルピニズム再読」「続・同」の書籍紹介をまとめたものだ。同じ「岳人」の書籍紹介「岳書縦走」（別に紹介している）に比べれば、多くは読んだことのある、あるいは知っている著名・著者がほとんどだ。

この本の冒頭「近代登山の発展と山岳図書」の、「健筆をふるった初期登山家たち」では、…日本山岳会の創立から雪と岩の本格的アルピニズムがおこるまでの時期の代表的な山の文筆家は小島烏水と田部重治であろう。小島は本職は銀行員であるが、雑誌「文庫」の記者をつとめていた文学青年で、特に紀行文の執筆に力を入れていた。本格的に登山をはじめてからは、「日本アルプス」全四巻がある。なお、山岳会初期の頃の回想を中心にまとめた「アルピニストの手記」が出ていて、求めやすく、内容も興味深い。

…田辺重治は「日本アルプスと秩父巡礼」を著す。田部は北アルプスでも重要な登山をしているが、彼の本領は奥秩父の森林美・溪谷美の紹介にあった。とりわけ、笛吹川東沢を湖行して甲武信岳に至った紀行「笛吹川を湖る」は名高い。

…もう一人、いかにも日本的な登山をおこない、筆をふるった人物として冠松次郎を挙げておこう。溪谷湖行のパイオニアで、黒部溪谷の十字峽を発見したことで知られる冠は、「黒部総谷」を著し、谷歩きという新しい登山スタイルの魅力を伝えた。その獨創性においてより高く評価すべきだろう。

この本は海外の山の本も紹介している。冒頭の「冬の岩壁からアルプス三大北壁へ」で、…ここで、戦後の登山界に大きな影響を与えた山の本として、海外山岳図書の翻訳に触れておかねばならない。初期のベストセラーとしては「処女峰アンナプルナ」（エルゾグ著、近藤等訳、「星と嵐」（レビュファ著、近藤等訳）、「八千メートルの上と下」（ブール著、横川文雄訳など）がある。昭和三十年代の翻訳書の特徴は、三大北壁をはじめとするアルプスの六級クライムが注目を集めたことと、独仏を中心とする大陸系クライマーの著書が普及したことだろう。「処女峰アンナプルナ」はヒマラヤ本の範疇だが、トレイ、ラシユナル、レビュファといった六級クライマーの活躍が強い印象を残した。…と解説している。

こうした新しい登山思潮に、戦後日本でのフランス文化流行を重ね合わせることも可能だ。ジャンポール・サルトルに代表されるフランス実存主義である。サルトルの「存在と無」、カミュの「異邦人」などは一九五〇年代の若いインテリの必読書であった。山の本の世界でそれに対応するのがレビュファ・近藤等のコンビである。レビュファ著、近藤訳の多くの本は、アルプスの高嶺の香りとフランスのエスプリの魅力をふりまいた。たしかに垂直の世界の闘いと実存主義の行動的なニヒリズムとは相性がよかった。…と述べている。

## 参考図書紹介 「山の名著 30選」

著者 福島功夫  
出版社 東京新聞出版局

序章 日本登山界の歩みと山岳図書

1. 日本の近代登山の発展と山岳図書
2. 戦後五十年、登山界の歩みと山岳図書

第一章 おすすめの名著・海外16選

1. アルプス登攀記／ウインパー

：

アルプス・コーカサス登攀記／アルピニズム・アクロバチコ  
わが山の生涯／キャンプ・シックス／未踏の山河／台岩壁の五十年  
白い蜘蛛／エベレスト その人間的記録／処女峰 アンナプルナ  
無償の征服者／星と嵐／八千米の上と下／わが山々へ／現代の冒険

：

16. ナンガ・パルパート単独行／メスナー

第二章 おすすめの名著・海外14選

1. 山行／榎有恒

：

雪・岩・アルプス／山と雪の日記／山 研究と随想／アルプス記  
山岳省察／雪山・藪山／山に憑かれた男／初登攀行／山靴の音  
マッターホルン北壁／青春を山に賭けて

：

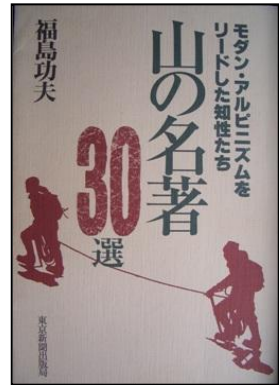
14. 岩壁よ おはよう／長谷川恒男

あとがきから…本書はただのブックガイドではないつもりだが、本格的な評論集を自認するのも、ちょっとためらわれる。登山の世界でどの程度批評が成立するか僕もまだ手探りの状態だからだ。…ポストモダンといわれる時代で、モダン・アルピニズム、もしくは登山におけるモダニズムから、僕たちは何を継承すべきか。大上段な物言いをすれば、そんなことを考えながら書いた。本書は山岳雑誌「岳人」に二年半にわたって連載した「アルピニズム再読」「続・同」(547～558/571～588)が本になっている。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧(取寄せ含め)可能

購入方法…東京新聞出版局＝品切 <2014.02現在>

アマゾン＝中古本¥247～＋送料¥250 <2014.02現在>



## 「岳書縦走：雁部貞夫著・ナカニシヤ出版」

この「岳書縦走：雁部貞夫著・ナカニシヤ出版」は、私の家の近くに練馬区立貫井図書館の山関係の書架で見つけた。本の名前が面白いので手に取ってみた。山に関する本の内容紹介や著者の紹介が中心となっている。一九七九年から一九八九年までの十年間に出版された本の書評である。

後で述べる「参考図書紹介」の目次では、各年に二冊（雑誌「岳人」の毎月掲載）挙げられているが、この紹介では、私の気になった書籍一冊のみを挙げている。あくまでも私の個人的趣向の選択である。山関係の書物の紹介としては百三十編の書評でかなり多い。しかも「あとがき」で著者も書いているように、地域的にはヒマラヤや中央アジアに関するものが多い。また、外国の著書の翻訳も多く、さらに写真集や地図なども紹介されている。

同じ「岳人」に掲載された山の本の紹介、福島功夫の「アルピニズム再読」「続・同」は、一九九三年から二年半の連載で時期的には少しあとになる。編集者の意図も少し違う。しかし、国内外の山の本を紹介していることは共通だ。合わせて読めば山の本のかなりを占めるはずだ。

出版された期間が限定された山関係の図書で、これ一冊で山の書物の全貌が知れるわけではない。ただ、比較的新しい出版物が多いといえよう。この本を一通り読んだ後で、借りるなり買うなりして、私が個別に読んでみたい本を挙げてみよう。写真集やヒマラヤなど海外テーマの本は外した。

登山や山の文学の歴史の本として、「日本山岳文学史（瓜生

卓造：一九七九年・東京新聞出版局）、「新稿 日本登山史（山崎安治：一九八九年・白水社）」、「岩と人：日本岩壁登攀史（齋藤一夫：一九八〇年・東京新聞出版局）」などがあげられる。私はこれらの本と、桑原武夫の「登山の文化史」を加えて「心の旅 山の文化史」として紹介、書評をまとめてみる。

山や自然の随想的な内容の本として、「うちなる山々（中野孝次：一九七九年・東京新聞出版局）」、「わが登高行・上巻（三田幸夫：一九七九年・名溪堂）」、「山と行爲（串田孫一：一九八一年・同時代社）」、「会心の山（佐伯邦夫：一九八三年・中央公論社）」、「沈黙の山（田中澄江：一九八四年・山と溪谷社）」、「森からの手紙（田淵義雄：一九八五年・小学館）」など。その他に私の個人的趣向の強い本の「初登攀行（松本竜雄：一九八〇年・中央公論社）」、「私の谷川岳（杉本光作：一九八一年・中央公論社）」など。いつか落ち着いて読み、それぞれにテーマづけして紹介、書評をまとめてみたい。

著者はこの本のあとがきで、…私は「登山」という行為を単なるスポーツの一分野だとは思っていない。文学が人間の「精神」や「実存」を言語によって表現したものと規定すれば、「登山」はその肉体的表現を主としたものということになるだろうか。その根拠として：「登山」や「自然」にかかわる書物の出版点数は、明治このかた、他のスポーツの分野をすべて加えたより多い。…このこと自体すでに、「山」や「山の書物」が、独自の「文化」を形成している証左であろう。…と述べている。私なりに言えば、多くの著名な文学者や歌人、さらに画家や、科学者まで、登山（山の旅）への参加者の多さが、その素晴らしさや価値観を証明していると思う。

## 参考図書紹介 「岳書縦走」

著者 雁部貞夫  
出版社 ナカニシヤ出版

はじめに

- 1979 中野孝次「うちなる山々」  
：  
1980 松本竜雄「初登攀行」  
：  
1981 瓜生卓造「桜の湖」  
：  
1982 島田 巽「遥かなりエヴェレスト…マロリー追想」  
：  
1983 佐伯邦夫「会心の山」  
：  
1984 田中澄江「沈黙の山…私の歴史山歩」  
：  
1985 玉木昭子「桧原村の台所から…山の暮らし、土の恵み」  
：  
1986 山崎安治「新編 日本登山史」  
：  
1987 大塚 大「北アルプスの湖沼」  
：  
1988 千坂正郎「北八ヶ岳の黒い森から」  
：  
1989 小林静生「山の本屋の日記」

あとがき

あとがきから…かつて「岳人」誌に11年にわたって連載した書評を一冊に集大成したこの「書岳縦走」を取りまとめた。…1970年代には日本の海外登山が最高潮に達した時代である。…全地球的規模で、日本の登山者たちは大移動を行っていたのである。…1980年代にはそれらの体験が書物となって一気に世に現れたのであった。

閲覧方法…地元図書館にて閲覧（取寄せ含め）可能

購入方法…ナカニシヤ出版＝ 品切 <2014.02 現在>

アマゾン＝ 中古本¥4489～＋ 送料¥250 <2014.02 現在>

